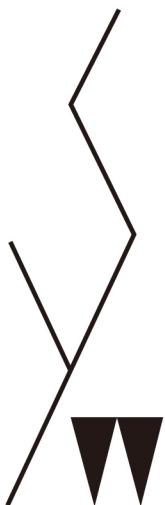


2018年度第18回女子美制作・研究奨励賞 達成・進歩報告書

白井 ゆみ枝



SHIRAI YUMIE WORKS

白井 ゆみ枝

1977年長野県生まれ、現在住。2000年女子美術大学デザイン学科卒業。

展覧会歴ほか

- 1999 グループ展「トランクギャラリー」開催(東京都内数カ所での路上展示)
- 2000 個展「夏休みうさぎを飼う」展(ピンポイントギャラリー)
- 2001 グループ展「ART DAYS」(ギャラリーイセヨシ)
- 2005 個展「花わたり」展(Compound café)
個展「花わたり~花中~」展(gallery conceal)
個展「指の先よりやってきた」(more café) 個展
- 2006 個展「花」展(スタイルズグッドフードサービス)
- 2010 詩人・高橋久美子との共同企画「ヒトノユメ」始動 「ヒトノユメ in TOKYO」展
(IID 世田谷ものづくり学校 IID GALLERY)
個展「う宙ぶらりん」展(ギャラリー芝生)
- 2011 「ヒトノユメ in 徳島」(徳島・第2倉庫アクア・チッタ、東新町一丁目商店街内仮店舗)
「ヒトノユメ in 愛媛」展(萬翠荘2階)
- 2013 「ヒトノユメ in 長野」展(笠原工業常田館製糸場跡)
「街のユメ」(上田市内商店街でのヒトノユメ作品の展示)
授業「冬がいっぱいいまんまる工作」(上田市立傍陽小学校2年生)
- 2014 個展「たゆたう 6月」展(心の花美術館)
授業「なんなんなんの木 なにがさくかな、みのるかな」(上田市立傍陽小学校2年生)
- 2016 ワークショップ「音のオーロラパビリオン」(上田市立美術館)
- 2017 個展「上田全天氣候展」(上田市立美術館)
授業「とんとんとんび」(上田市立本原小学校3.4年生)
上田マチ×マチフェスティバル参加展示「Flam+ing」海野町商店街空き店舗にてインсталレーション
(上田私立美術館主催)
審査員「ざわめきアート展2017 信州の障がいのある人の表現とアーリュ・ブリュット
(安曇野市豊科近代美術館、佐久市立近代美術館)
ワークショップ「ゆみえちゃんと・ともちゃんの音と色のコラボレーション」(豊科近代美術館)
- 2018 グループ展 VOCA展 2018 現代美術の展望ー新しい平面の作家たち(上野の森美術館)
ライブペインティング「太郎山深呼吸」(うえだ太郎フェスティバル)
ワークショップ「変身!まんまるさん」(信濃美術館主催)
個展「しかおどりのはじまり」(上田ノキロソーコ,上田街中演劇主催)
演劇「鹿踊りのはじまり」舞台美術として参加(長野市芸術館アクトホール)
- 2019 ワークショップ 「ケンジ脳学校 夏期講習／星まつりの図画工作」(東御市文化会館主催)

刊行物

- ・高橋久美子:詩/白井ゆみ枝:絵 詩画集『太陽は宇宙を飛び出した』(2010年 FOIL)

ホームページ

SHIRAI YUME WORKS <http://shiraiyumiie.com>

制作・研究の動機・目的

白井 ゆみ枝

動機：ただただ絵が好きでした。なぜこんなに好きで、好きすぎるゆえ苦しくもなるのに、それに向かい合っていないと、自分の力が十分に発揮できていないような、身体の芯が嘘ざむいような気がします。そしてこの自分を捉える「絵」という存在とは、何なのだろうか？個人の感覚、身体に深く根ざしているようで、それはとても深いところで、同じように絵に捉えられ、向き合い続ける人々と、時代や地域を超える普遍的な「絵」という流れで繋がっているような感覚を覚えます。

それは「絵」という創作に限られたものではないし、また追求をする人のみに与えられた特権でもなく、この流れに触れて世界に現れたものに触れるときには、誰でもがその流れに繋がって行けるものであると、感じます。

制作を続けて約20年を越えて、作品の中に私なりの流れが見えるようになりました。自分でコンセプトを決めて制作をしていくのが苦手なので、常に出来上がったものの軌跡を見て自分を理解しています。全力で向かい合ってしてきた「絵」には世界とのつながりに必要なことがすべて含まれていて、「絵」という存在こそが私の道先案内人であり、師のような存在であると気づきました。。

目的：そういう存在としての「絵」を捉えて描き、美術館という特別な場所だけではなく、広く開けた場で触れ合うことができるような、「絵」と人が出会う“場”的創設を目指して活動していきたいです。

私自身がそうやって様々な「絵」に出会うことで、力を生み出してきたように、「絵」と人が出会うことで生まれる力が、健やかに広がっていき、生き生きとした活力を生み出すきっかけになることを願い、これからも活動していきます。

2010~2013年

「ヒトノユメ」詩人、高橋久美子との2人展

2010年:ヒトノユメin Tokyo (IID世田谷ものづくり学校IIDギャラリー)

2011年:ヒトノユメin 徳島 (徳島・第2倉庫アクア・チッタ、東新町一丁目商店街内仮店舗)

ヒトノユメin愛媛 (萬翠荘2階)

2013年:ヒトノユメin長野 (笠原工業常田館製糸場跡) 「街ノユメ」を、上田市内商店街隈で開催。

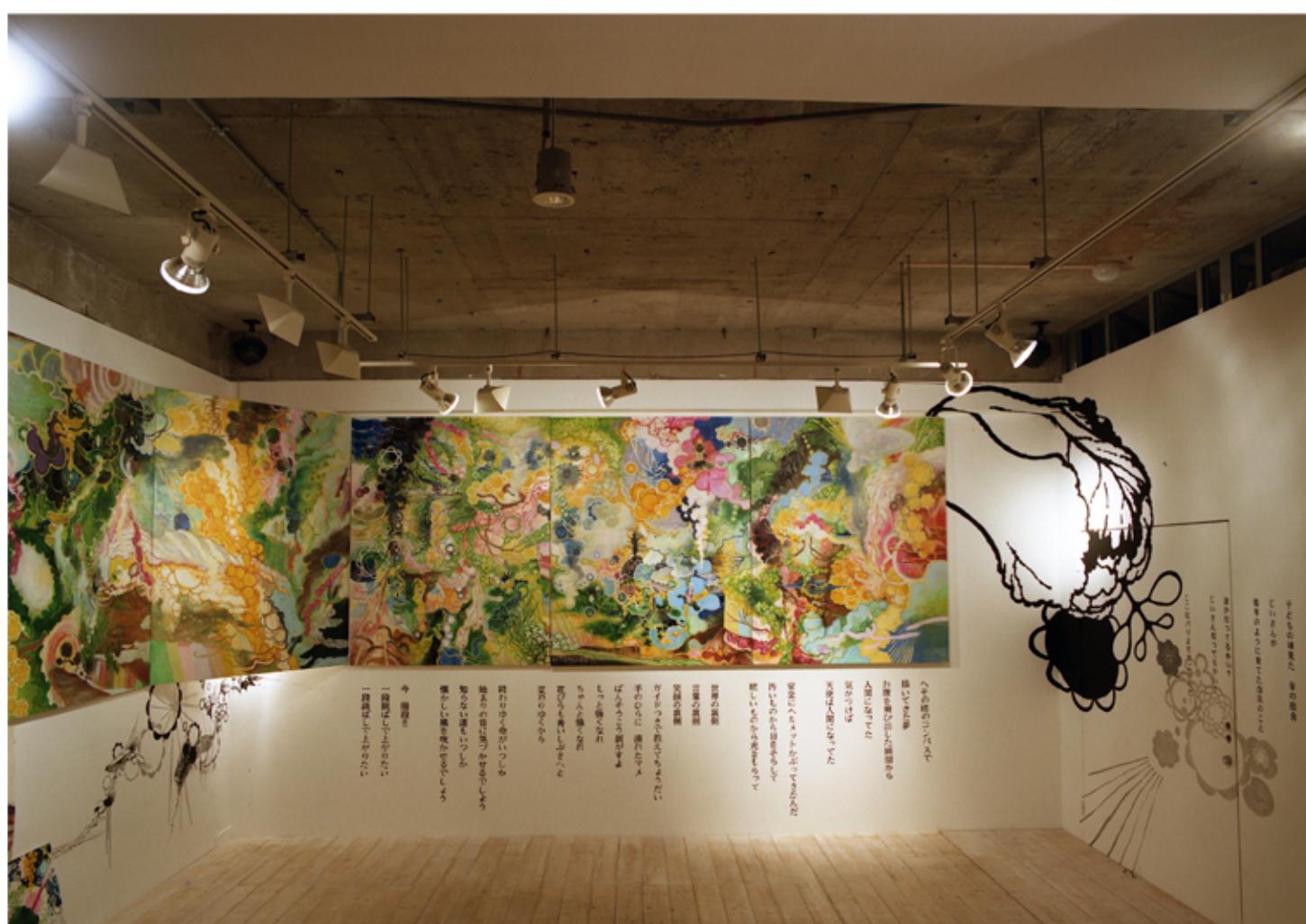


詩人高橋久美子の詩と、私の絵による2人展。どんな場所で、どのような形で二人の世界観を表現すべきかを考え、入場料形式で、会場の設営、ボランティアの募集、運営の全てを行いました。またその場所でしか感じられない空間を目指し、若手建築家にチームに加わってもらい、インスタレーションでの展示にも力を入れました。会期も1ヶ月から2ヶ月間と長く、その土地ならではのイベント開催を、地元ボランティアと一緒にを行うことでより地域に根ざした展示をすることができました。

◀東京展、会場入り口

4メートルほどの長さのトンネルに、作品が描かれている。くぐり抜けて、メイン会場に到着する。

▼東京展メイン会場





◆徳島展

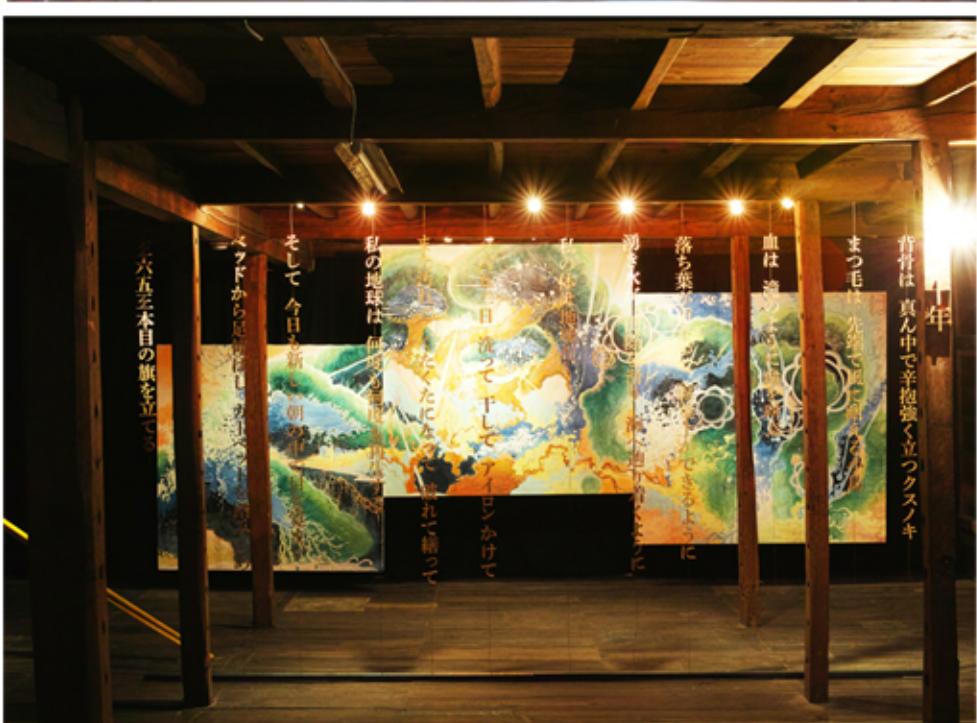
海沿いの埠頭の倉庫を借りました。会場内には特設テントが張り巡らされ、その中に飾られた作品を回遊しながら鑑賞し、また波打ち際での時間を楽しんでもらいました。市内商店街の空き店舗を利用し、公開制作も同時開催。商店街と埠頭をつなぐ周遊船により移動し、阿波踊りの開催期間にも重なることから、徳島の風土を存分に感じてもらえる展示となりました。



◆愛媛展

松山市内のお城のすぐ下に佇む迎賓館、「萬翠荘」。文学の街を象徴するような重装で瀟洒な造りの建築内に、言葉と色の洪水を巻き起こすことで、対比としての軽やかさ、儂さを表現できなかつと試みました。

設営から運営を、地元の自由大学の授業の一環として行い、協力いただきました。



◆長野展

地元上田市の繁栄の象徴として、国の重要文化財にも指定されている、蔵蔵での大規模な展示となりました。

「ヒトノユメ」の集大成として、過去のアーカイブに、それぞれの世界観を表現した作品は、2ヶ月に及ぶ現地での制作による建築物と一体となって完成しました。

また市街地の商店街を中心に作品を展示し、それらを探しながら街歩きを促す地図を地元大学生と制作しました。県内外から約4000人の集客を記録し、ボランティア数も50名を超え、地元と県外からの人々が、展示を介して触れ合う“場”的創設ができました。

2017年

個展 「上田全天氣候展」 (上田市立美術館サントミューゼ)

初の大規模個展を、地元の市立美術館で開催することができました。

上田ならではの展示を構想し、メイン作品はほぼ新作で、約3年の制作期間を要しました。

兼ねてから構想のあった、東西南北のイメージで一方向1点、4点組の作品を、

故郷上田を中心に考えて、具体的な地形、風土から制作し、会場全体に配しました。

中央には代表作「SKY ENA HOUSE」を配置しました。

サブ会場には、初めて画家を志した女子美術大学で制作した初期作品を展示しました。



▲東 いのちはる 2016 / 油彩、麻布、木製パネル / h:207.0×w:827.0



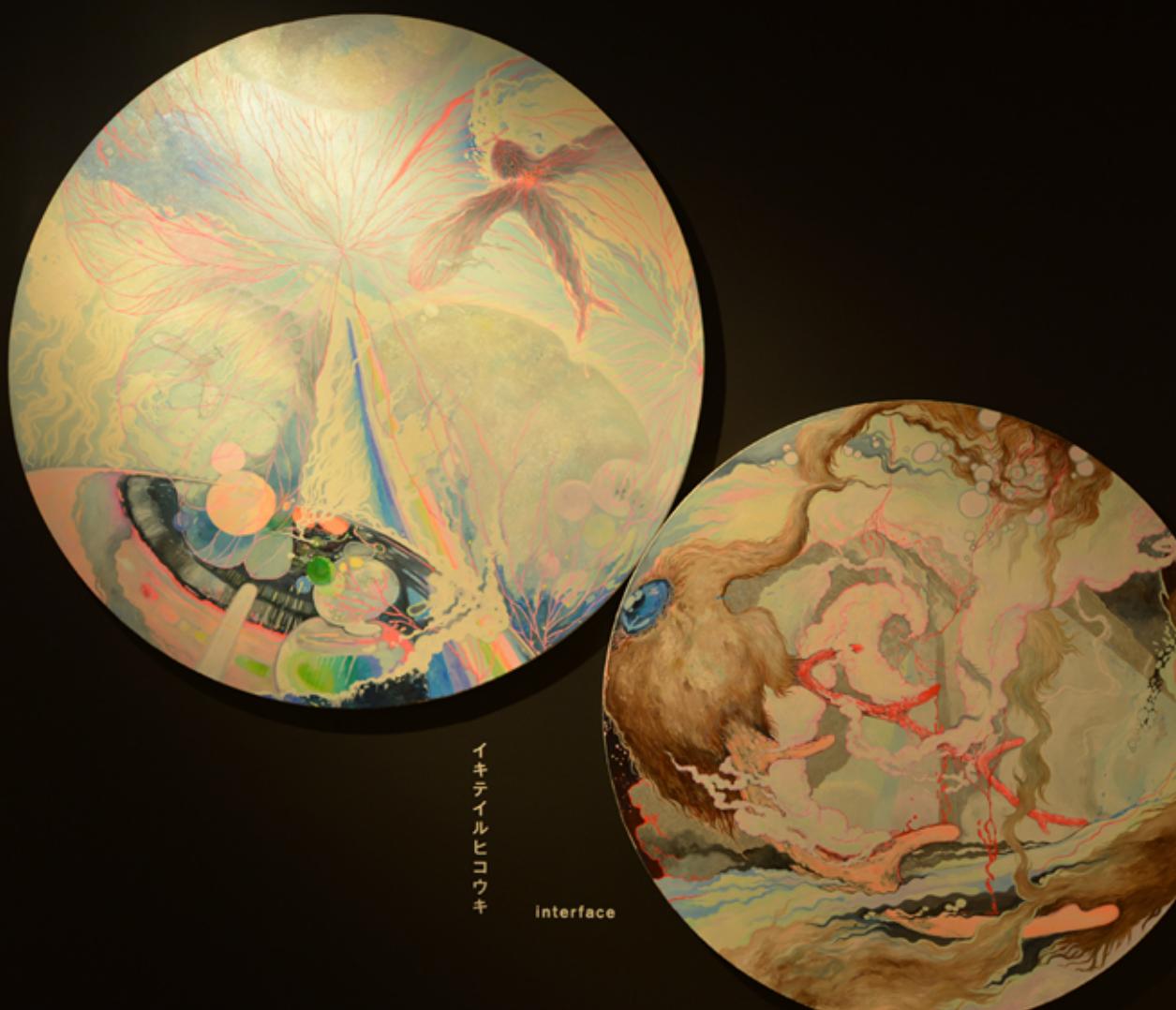
▲会場全体

手前（入口）「東「いのちはる」」：烏帽子の稜線と、始まりの季節春の水田を描いた作品に展示のはじまりを託しました。

左、南「千曲LINE」：千曲川の流れに時間の流れの交差する瞬間を重ね、丸型キャンバス5点を配置。

右、北「たましいふゆる」：地元民に愛される太郎山に起こる「逆さ霧」と、北極星の回転と重なり合うような、身体の持つ流動性を表現。

奥、西「あきあきみつる～夕焼けをつかまえる～」 中央、「SKY ENA HOUSE」



▲南 千曲LINE（部分） 左：イキテイルヒコウキ 右： interface ▼北 たましいふゆる





▲ SKY ENA HOUSE (内部絵画) 2013-2008 / 油彩、キャンバス / h:162.0×w:130.3(13枚組)



▲ SKY ENA HOUSE (テント) 2013 / 鉄、アルミ、綿布 / h:386.9×φ : 588.1



赤を宿す

2016

木、布、ビーズ、スパンコール、
鹿角、毛皮

h:52,0×w:137,0×d:100,0



▲ 結晶女子 2015 / 布、糸、ビーズ / $\phi: 12.0 \times w: 90.0$



▲ そらのめ 2016 / 布、ビーズ、スパンコール、毛皮、糸、繩 / $\phi: 30.0 \times w: 123.0$

2018年

グループ展「VOCA展」（上野の森美術館）

アーツ前橋、辻 瑞生学芸委員により推薦。



1
そこなみ
Left: Undercurrent

2
うしろにとおく
Far Back
油彩、綿布・鉄枠
Oil on cotton and iron frame
Φ 200 × 5cm

▲ 左：そこなみ 右：うしろにとおく 2017 /油彩、綿布、鉄製フレーム /各 Φ : 170.0

2018年

個展「しかおどりのはじまり」（上田市ノキロソーコ）

上田街中演劇祭の一環として、演劇「鹿踊りのはじまり」の舞台美術を兼ねて、

展示「しかおどりのはじまり」を作りました。主催者の方と街を歩き、演目、会場共に探す中、
宮沢賢治原作の「鹿踊りのはじまり」に出会いました。

▼ 踊りながら 走りながら廻りながら 2018 / 油彩、綿布、鉄フレーム / φ: 170.0





▲ しかおどりのはじまり 2018 / 鉄製フレーム、布、鈴、布部分にペイント、鹿の頭骨のモビール / φ:450.0×h: 160.0



2018年

演劇「鹿踊りのはじまり」

(初演：上田市ノキロソーコ、再演：長野市芸術館アクトスペース)

原作：宮沢賢治 演出：仲田恭子、白井ゆみ枝





2018 - 2019年 受賞後

受賞後の主な活動

・丸型キャンバスの「庭」シリーズ

受賞前に描いた「踊りながら 走りながら廻りながら」は、連作になる作品だと感じ、現在2枚を製作中。（上部写真）この後2枚追加して、計5枚の連作を完成予定です。「庭」の存在に内（家、プライベート）と外（往来、社会）との緩やかな境界を感じ、そのあり方に、様々な年齢や性別などによって移り変わる、個人と世界との距離感を表現して描けないかと模索しています。

・サイト・スペシフィックな作品への関わり

昨年から、地元上田市でこれから出来上がる店舗への、作品制作の依頼を受けることが増えました。開店前の店舗のイメージや構想を聞きながら、その空間に呼応できるような作品作りを心がけています。サイズなどの制約も含め、新たな出会いがもたらしてくれる感覚は、これから的作品作りに大きな影響を与えてくれると感じています。

そんな中、来年（2020年）春に竣工予定の、公共施設への常設作品の依頼があり、現在製作中です。その土地から吸い上げた感覚を、地元の子供たちとのワークショップを行った上で、一つの作品に作り上げて設置します。設計の段階からアート作品の設置を予想して空間を作っているケースは稀で、設計者、施設の職員の方と一緒にになって作品を作って行けるのは、今まで培った部分を生かしながらも、初めての経験でとても勉強になっています。



苗床

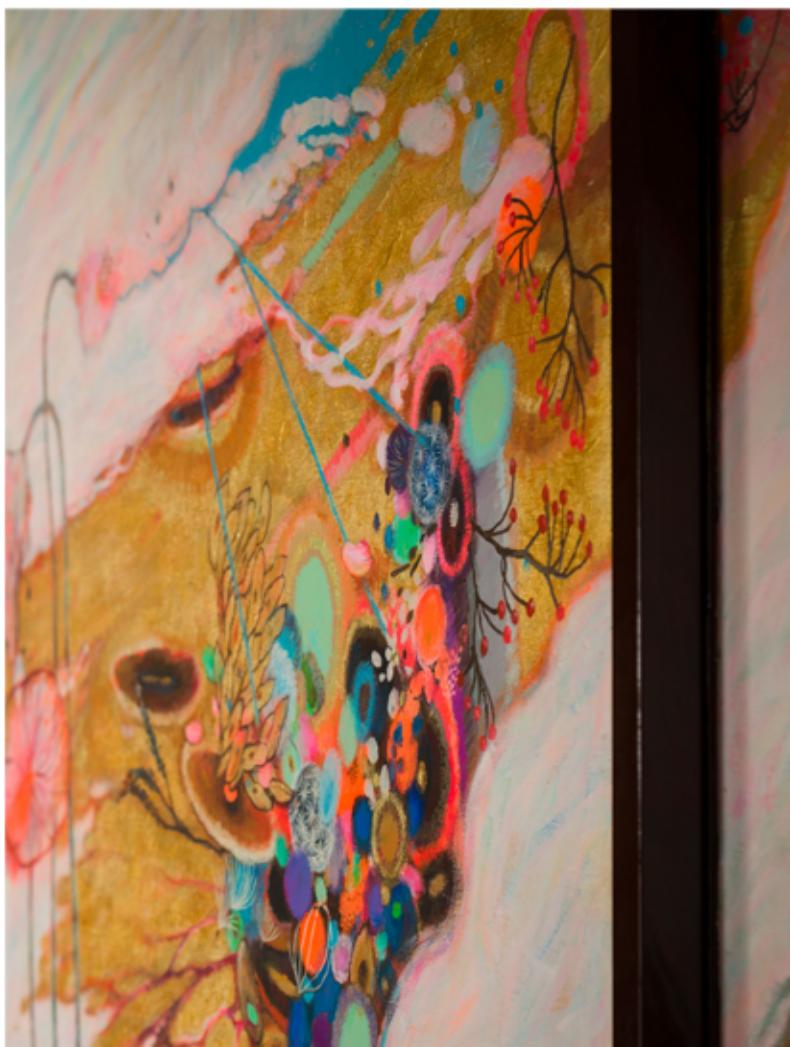
2019

ふすま、アクリル絵の具

w:360.0 × h:190.0

自家製酵母パン たね

店舗に常設





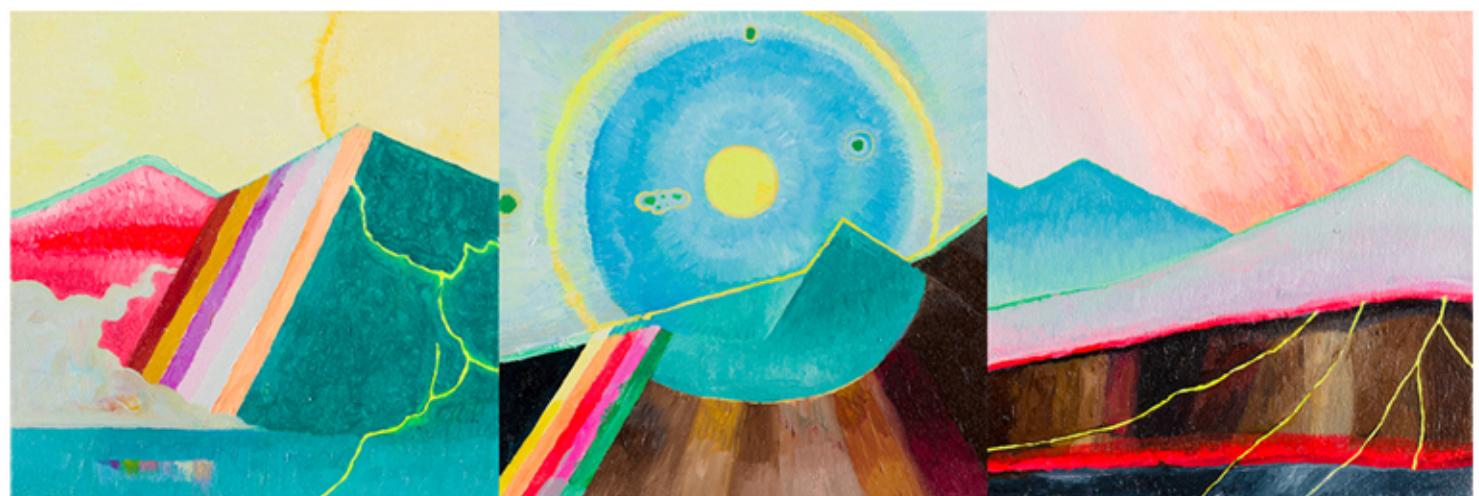
▲ 太朗山深呼吸 2018 -2019 / アクリル絵の具、布、木製パネル / w:520.0×h:180.0 来年上田市店舗常設予定



▲ リバー・ランズ・スルー・イット 2019 / 鉛筆、アクリル絵の具、紙 / w:85.0×h:85.0



▲ うたい- utai - シリーズ 2018 -2019 / 油彩、キャンバス / w : 50.0 × h : 50.0



▲ つたう 2018 / 油彩、キャンバス / w: 66.0 × h: 22.0

結び：受賞後に

2018年にこの賞を頂いた頃、2017年に終えた初の大規模個展が、いかに自分に大きな影響を与えたかを実感しました。それは体力的にも、精神的にも一つの限界を出し切ったという思いで、今までに感じてきた心の動きが、全く動かないように感じたことでした。

年齢も40歳を迎え、20代、30代を思うままに感じるままに、力のあるままに表現してきたその感覚が、急に衰えてしまったような気がしました。そんな中出会ったのが演劇の世界でした。今までも観劇はしてきたのですが、目の前で演劇の空間が立ち上がっていく感覚に、初めて肌で触れて、感じしたことのない感動を経験しました。

見ると行うことの違いに久しぶりに刺激を受け、重い身体の存在が開かれていくようでした。そしてその経験は、自分の身体がちゃんと年齢を重ねたという事実に向かい合うことへのきっかけとなりました。今の自分の感じるものを、無理せず描こう。

その思いの中、奨励賞への応募のために過去の作品を見返し、作品を言葉で表現したことは、自分の活動に客觀性を持つ上でもとても大切なきっかけとなりました。

その後、サイト・スペシフィックな作品制作につながる仕事が増えたのですが、個人での制作をベースにしながらも、様々な条件と呼応するように作品を作り上げていくこれらの仕事は、自分の中に客觀性という隙間ができたからこそ、舞い込んできた仕事だと感じています。

今までに培ってきたものを、すべて活かせるこれらの制作は、まさに自分がこれから力を入れて取り組んでいきたいと思えるものとなりました。

また奨励賞への応募時に、空に向かって伸び上がっていく成長の時期をすぎ、

稲穂が実りで少し垂れ下がっているような感覚を描きたいと思いました。

キリキリと湧き上がる力が少し緩む。今は緩むという感覚が、すごく重要な感じます。

その緩みの力を描こうと試みています。

具体的には空を見上げていたのが、より地面に近い、足ものとの世界、土の近くで行われている、人々の営みや植物たちの世界に目が行くようになりました。

制作の上でとても大きな節目となりましたが、応募をして受賞をしたことで、

節目というものは、自分で作っていくものだということを強く実感できました。

今後は、子供たちと行うワークショップに力を入れて行こうと思っています。

（11月に子供たちとのワークショップを開催。そこで作られた作品から、さらに構想を膨らませて、作品作りをしていきます。）

描くという行為を直に伝え、また子供たちが発する力を受け取る、よりダイレクトに力の交換ができる場としてとても重要だと考えています。

また海外でもこういったワークショップの活動を行うべく、レジデンスへの応募を視野に、活動していこうと思います。